



E-ASIA
university of oregon libraries

<http://e-asia.uoregon.edu>

亡び行く江戸趣味

淡島寒月

底本：「梵雲庵雑話」岩波文庫、岩波書店

1999（平成 11）年 8 月 18 日第 1 刷発行

亡び行く江戸趣味

淡島寒月

江戸趣味や向島沿革について話せとの御申込であるが、元来が不羈放肆な、
しかも皆さんにお聞かせしようと日常研究し用意しているものでないから、どんな話に
終始するかあらかじめお約束は出来ない。



人はよく私を江戸趣味の人間であるようにいっているが、決して単なる江戸趣味の
小天地に踞踏しているものではない。私は日常応接する森羅万象に親し
みを感じ、これを愛玩しては、ただこの中にプレイしているのだと思っている。洋
の東西、古今を問わず、卑しくも私の趣味性を唆るものあらば座右に備えて
悠悠自適し、興来って新古の壺巻をも緋けば、河鹿笛もならし、朝鮮太
鼓も打つ、時にはウクレルを奏しては土人の尻振りダンスを想って原始なチャバ土人
の生活に楽しみ、時にはオクライナを吹いてはスペインの南国情緒に陶醉もする、
またクララ・キンベル・ヤングやロンチャニーも好愛し、五月信子や筑波雪子の写真も
ざが座臥に用意して喜べる。こういう風に私は事々物々総てに親愛を見出すのである。



オモチヤの ^{じゅつとく} 十 徳

一、トーランドは自由平等の樂地 ^{なり} 也。

一、各自互に平和なり。

一、縮小して世界を觀ることを得。

一、各地の風俗を知るの便あり。

一、皆 ^そ 其の知恵者より成れり。

一、沈黙にして雄弁なり。

一、朋友と面座上に接す。

一、^そ 其の物より求めらるゝの煩なし。

一、^{これによりて} 依 之 我を教育す。

一、年を忘れしむ。

皆おもちや子供のもてるものゝみを

それと思へる人もあるらむ

これが、私が応接する総てを愛玩出来る心で、また私の哲学である。従って玩具を

損失したからとて、少しも惜いとは思わない。私は ^{しやはん} 這 般 の大震災で世界の各地か

ら ^{しゅうしゅう} 蒐 集 した再び得がたい三千有余の珍らしい玩具や、江戸の貴重な資料を全

部焼失したが、別して惜しいとは思わない。虚 ^{きょしんたんかい} 心 坦 懐、去るものを追わず、来

るものは拒まずという、未練も執着もない ^{むがい} 無 碍 な境地が私の心である。それ故私の

趣味は常に ^{へんせんてんてん} 変 遷 転 々 として極まるを知らず、ただ世界に遊ぶという気持で、

江戸のみに限られていない。私の若い時代は江戸趣味どころか、かえって福沢諭吉

先生の開明的な思想に鞭撻^{べんたつ}されて欧化に憧れ、非常な勢いで西洋を模倣し、家の柱などはドリックに削^{けず}り、ベッドに寝る、バタを食べ、頭髮までも赤く縮^{ちぢ}らしたいと願ったほどの心酔ぶりだった。そうはいえ私は父から受け継いだのか、多く見、多く聞き、多く楽しむという性格に恵まれて、江戸の事も比較的多く見聞きし得たのである。それもただ自らプレイする気持だけで、後世に語り伝えようと思うて研究した訳ではないが、お望みとあらばとにかく漫然であるが、見聞の一端を思い出づるままにとりともなくお話して見よう。



古代からダークとライトとは、文明と非常に密接な関係を持つもので、文明はあかりを伴うものである。元禄時代の如きは非常に明^{あかる}い気持があつたがやはり江戸時代は暗かった。



花火について見るも、今日に較^{くら}ぶればとても幼稚なもので、今見るような華やかなものはなかった。何んの変哲も光彩もないただの火の二、三丈も飛び上るものが、花火として大騒ぎをされたのである。一体花火は暗い所によく映ゆるものであるから、今日は化学が進歩して色々のものが工夫されているが、同時に困りが明るくされているので、かえってよく環^{かんきょう}境と照映しない憾^{うら}みがある。



昔から花火屋のある処は暗いものの例となっている位で、店の真中に一本の燈心を灯し、これを繞^{めぐ}って飾られている火薬に、朱^{しゅがき}書された花火という字が茫然と浮^{うきだ}出している情景は、子供心に忘れられない記憶の一つで、暗いものの標語に花火

屋の^{あんどん}行燈というが、全くその通りである。当時は花火の種類も^{わず}僅かで、大山桜とか鼠というような、ほんのシューシューと音をたてて、地上にただ落ちるだけ位のつまらない程度のもので、それでもまたミケンジャクや烏万燈等と共に賞美され、私たちの子供の時分には、日本橋横山町二丁目の^{かぎや}鍵屋という花火屋へせっせと買いに通ったものである。



芝居について見るも、今日の如く照明の発達した明るい中で演ずるのではなく、江戸時代は全くの暗闇で芝居しているような有様であったので、昔は^{つら}面あかりといって長い二間もある柄のついたものを、役者の顔前に差出して芝居を見せたもので、なかなか趣きがあった。人形芝居にしても、今日は明るいためにかえって人形遣いの方が邪魔になってよほど趣きを打壊すが、昔は暗い上に八つ口だけの赤い、真黒な「くろも」というものを着付けていたので^{めざわ}目障りではなかった。あるいは^{もくぎよ}木魚や鐘を使ったり、またバタバタ音を立てるような種々の形容楽器に苦心して、劇になくてはならない気分を相応に添えたものである。芝居の時間も長くは^ねねは十二時過ぎから一時過ぎに及び、朝も暗い^{うち}中から^{おし}押かけて行くという熱心さで、よく絵に見かける半身を前に乗り出すようにして行く様があるが、どんなに一生懸命であったかを実証している。



昔はまた役者の^{かんざし}簪とか、紋印がしてある^{せんす}扇子や^{くし}櫛などを身に飾って狂喜したものだ。で役者の方でも、狂言に^{ちな}因んだ物を娘たちに^{わか}頒って人気を集めたもので、これを浅草の^{きんかどう}金華堂とかいうので造っていた。当時の五代目菊五郎の人気な

どは実に素晴らしいもので、一丁目の中村座を越えてわざわざ市村座へ通う人も少くなかった。



前述もしたように、とにかく江戸時代は暗かった。だが文明は光を伴うものである。

我国には古くから八間という^{あかり}燈があった。これは寺院などに多くあるもので、実際は八間はなかったが、かなり大きいのでこの名がある。また当時よく常用されたもの

^{ろうだい}に蠟台がある。これは^{ろうそく}蠟燭を灯すに用い多く^{あいづ}会津で出来た、いわゆる絵ローソクを使ったもので、今日でも東本願寺など浄土宗派のお寺ではこれを用いている。

中には^{たけのこがた}筍形をしたのもあった。また行燈に入れるものに「ひょうそく」というものを用いた。それから今でも奥州方面の山間へ行くとある「でっち」というものが使わ

れた。それは^{まつやに}松^ね脂の蠟で練り固めたもので、これに類似した田行燈というものを

百姓家では用いた。これは今でも^{いち}一の^{せき}関^{のこ}辺へ行くと遺っている。



支那から伝来して来た^{ちくし}竹紙という、紙を^{よりあわ}燃^{ひなわ}合せて作った火縄のようなものがあつたが、これに点火されておつても、一見消えた如くで、一吹きすると火を現わすの

でなかなか経済的で、煙草の^{ひつけ}火附に非常に便利がられた。また明治の初年には

^{がんどうちょうちん}竈燈提灯という、如何に上下左右するも中の火は常に安定の状態にあるよ

うに、^{たくみ}巧に造られたものがあつたが、現に熊本県下にはまだ残存している。また当時の質屋などでは必ず金網のボンボリを用いた。これはよそからの色々な大切なもの

を保管しているので、万^{おもんぱ}一を慮^{おもんぱ}かって特に金網で警戒したのである。



明治時代のさる小説家が^{なまはんか}生半可で、彼の小説中に質屋の倉庫に提灯を持って入ったと書いて識者の笑いを招いた事もある。越えて明治十年頃と思うが、始めてランプ洋燈が移入された当時の洋燈は、パリーだとか^{ロンドンあたり}倫敦辺で出来た舶来品で、割合に^{あかる}明るいものであったが、困ることには「ほや」などが^{こわ}壊れても、部分的な破損を補う事が不可能で、全部新規に買入れねばならない不便があった。石油なども^{ふうろう}封蠟で^{かん}缶してある大きな^{かめいり}罎入を一^{ひとかん}缶ずつ^{もと}購めねばならなかった。



そんな具合でランプを使用する家としては、ほんの油町に一軒、人形町に一軒、日本橋に一軒という^{まれ}稀なものであったが、それが^{ガスとう}瓦斯燈に変わり、電燈に移って今日では^{しょっこう}五十燭光でもまだ暗いというような時代になって、ランプさえもよほどの^{さんかんへきち}山間僻地でも全く見られない、時世の飛躍的な推移は^{きょうがく}驚愕の外はない。瓦斯の入来したのは明治十三、四年の頃で、当時^{よしわら}吉原の金瓶大黒という女郎屋の主人が、東京のものを一手に引受けていた時があった。昔のものは花瓦斯といって^{おお}焰の上に何も^{おお}蔽わず、マントルをかけたのは後年である。



江戸から東京への移り変りは全く躍進的で、総てが全く^{かくせい}隔世の転換をしている。この向島も全く昔の^{おもかげ}影は失われて、西洋人が讚美し憧憬する^{にしきえ}広重の錦絵に見る、隅田の美しい流れも、現実には^{ばいえん}煤煙に汚れたり、自動車の^{あお}煽る^{こうじん}黄塵に^{まみ}塗れ、殊に震災の^{じゅうりん}蹂躪に全く荒れ果て、隅田の情趣になくてはなら

やかたぶね
ない屋形船も乗る人の気分も変り、型も改まって全く昔をしの
偲ぶよすがもない。こ

ふださ
の屋形船は大名遊びや町人の札差しが招宴に利用したもので、大抵は屋根がなく、
一人や二人で乗るのでなくて、中に芸者の二人も混ぜて、近くは牛島、遠くは水神の
森に遊興したものである。



みめぐり がんぎ
向島は桜というよりもむしろ雪とか月とかで優れて面白く、三囲の雁木に船を

つな
繋いで、秋の紅葉を探勝することは特によろこばれていた。季節々々には船が

ふくそう
輻輳するので、遠い向う岸の松山に待っていて、こっちから竹屋！ と大声でよぶ

こ ほうふつ
と、おうと答えて、お茶などを用意してギッシギッシ漕いで来る情景は、今も髣髴と

おも
憶い出される。この竹屋の渡しで向島から向う岸に渡ろうとする人の多くは、芝居や

うちきょう
吉原に打興じょうとする者、向島へ渡るものは枯草の情趣を味うとか、草木を愛

ものみゆさん
して見ようとか、遠乗りに行楽しようとか、いずれもただ物見遊山するもののみで

あった。



なりひら
向島ではこれらの風流人を迎えて業平しじみとか、紫鯉とか、くわいとか、芋とか

も
土地の名産を紹介して、いわゆる田舎料理麦飯を以って遇し、あるいは主として川魚

ごちそう おきて
を御馳走したのである。またこの地は禁猟の域で自然と鳥が繁殖し、後年掟の

ほそく
ゆるむに従って焼き鳥もまた名物の一つになったのである。如上捕捉する事も出来

ない、御注文から脱線したとりとめもないものに終わったが、予めお断りして置いた通り

常にプレイする以外に研究の用意も、野心もない私に、組織的なお話の出来ようはずがないから、この度はこれで ^{せめ}責をふさぐ事にする。

(大正十四年八月二十四、五、六日『日本新聞』)

底本：「梵雲庵雑話」岩波文庫、岩波書店

1999（平成 11）年 8 月 18 日第 1 刷発行

※「ミケンジャク」のあとに編集部注記がありますが、除きました。

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。

（青空文庫）

入力：小林繁雄

校正：門田裕志

2003 年 2 月 9 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。